

『思考の整理学』

外山滋比古 著 ちくま文庫 546円(税込)

自覚的に“考える”ことで 社会人としてのヒントが得られる

会員 阿部 憲太郎 (59期)



本書は、考えるというのがどういうことなのか、また、自己の考えやアイデアをまとめるにはどのようにすればよいのかといった、いわば知的活動のあり方について、著者である英文学者が自らの経験を基にまとめたエッセイである。

普段何気なく考えるという作業を行っているものの、考える作業そのものについて自覚的に考えることをすることはないはずである。この点、考えるということは著者いわく、知識や事実などの情報を抽象化して整理することにある（このことを、著者は本書において「メタ化」と称している）とのことである。情報をメタ化することにより、その情報があらゆる場面で利用できると述べている。このような情報を抽象化して整理する方法が、著者の経験談とともに紹介されている。その上で、普段からアイデアや情報をストックする方法として、ノートや手帳の活用を提唱し、著者自らの利用方法を紹介している。これを弁護士の仕事に置き換えると、個別の案件を処理するなかで考えた点、問題となった点を抽象化して整理することが出来れば、同種の案件を処理するに際して役立つはずであり、本書で紹介されているアイデアや情報をストックする方法というのは参考になるものと思われる。

また、一般的に、大多数の弁護士にとっては、各種資料の収集と並んで、準備書面や意見書など各種

書面の作成に多大な労力を割くことになるものと思われる。しかしながら、各方面から収集した資料を準備して書面を作成しようと思ひ、いざ机に向かっても、考えがまとまらず、一向に筆が進まないといった経験は一度ならず経験するところである。

著者は、このような場合にアイデアを一つの作品に仕上げる方法として、時間をかけてアイデアを寝かせる、先人の考え方を複数取り入れて組み合わせる等、さまざまな方法を提案している。

本書に書かれている内容は他のさまざまな書籍においても紹介されている。しかし、本書は1986年に発行されており、本書を読んでヒントを得たビジネスパーソンが自分なりに試行錯誤を行い、成功した者がそのノウハウをビジネス本として著しているものと思われる。そういった意味では、僅か200ページ強の本書1冊を読むことが、何十冊ものビジネス本を読みあさると同等の価値があるものと思われる。

本書を読めば、考えるということについて自覚することになるとともに、情報やアイデアの収集、あるいはそれを活用する方法など、社会人として仕事を行っていくに際して何らかのヒントが得られることと思われる。そういった意味では、弁護士登録してから日が浅く、これから本格的に弁護士としての仕事をしていく若手の方々（自分も含めて）にとっては読んで損のない1冊である。